

O-5-11

骨粗鬆症患者における血清25(OH)D濃度の分布と骨代謝マーカー、骨密度との関係

沖縄赤十字病院 整形外科

○青木 佑介¹⁾、大湾 一郎、伊佐 智博、森山 朝裕、金城 聡

【目的】ビタミンDの欠乏は筋力低下、転倒、大腿骨近位部骨折を引き起こす要因である。ビタミンDの多くは皮膚で紫外線の照射を受けることによりコレステロールから生合成される。沖縄の紫外線量は他府県よりも多く、ビタミンDの生合成で有利である一方で、沖縄には大腿骨近位部骨折の患者が多い。今回、骨粗鬆症が疑われた患者に対しビタミンD濃度を測定したので報告する。【対象・方法】2018年10月から2019年4月末までに骨粗鬆症を疑い、血清25(OH)D濃度を測定した患者139例、50歳未満6例、50代18例、60代26例、70代35例、80代43例、90歳以上11例を対象とした。年齢、性別、骨密度、骨折歴、血清25(OH)D濃度(ng/ml)、血清TRACP-5b濃度(mU/dl)について検討した。【結果】血清25(OH)D濃度は、10未満37例(27%)、10台82例(59%)、20台16例(11%)、30以上4例(3%)であった。全体の85.6%において25(OH)Dが20 ng/ml未満と低値であり、骨密度が70%以下では70%以上と比較し有意に25(OH)Dが低下していた。25(OH)DとTRACP-5bとの間に有意な相関は認めなかった。【考察】本研究では、全体として25(OH)D濃度が低い傾向を認め、骨粗鬆症患者では有意に低下していた。25(OH)DとTRACP-5bとの間に有意な相関を認めなかったが、25(OH)Dの骨代謝における役割についてはさらなる検討が必要と考えた。

O-6-1

急性心筋梗塞入院中に急性心不全を来たした一例

伊勢赤十字病院 循環器内科

○おとした なつみ 夏実、山岸歩空人、海野 航平、森 達哉、堀口 昌秀、高村 武志、刀根 克之、坂部 茂俊、前野 健一、泉 大介、世古 哲哉、笠井 篤信

【症例】71歳、男性。【主訴】胸痛。【現病歴】XX年5月某日胸痛を自覚。近医を受診しAMIの疑いで転院搬送。【嗜好】飲酒：ウイスキーロック1杯/日、喫煙：1箱/日(1年前に禁酒禁煙)。【身体所見】血圧157/97mmHg、脈拍95/min、肺音清、心音整、雑音なし。【検査所見】12誘導心電図においてV2～V6誘導でST上昇、心臓超音波検査において前壁～前壁中隔の壁運動低下あり。【診断、治療】冠動脈造影検査を施行し左冠動脈下行枝の100%狭窄を認めたため、AMIと診断し、PCIを施行した。【入院後経過】全身状態良好であったため入院2日目にACE阻害薬、β遮断薬を開始した。しかし、徐々に尿量、血圧の低下を認め、収縮期血圧は60mmHg台となった。血管内脱水を考慮し、輸液を負荷したが、入院3日目に排尿がなくなり、血圧上昇も認めなかった。心臓超音波検査で心拍出量は低下しておりポンプ機能不全が原因と考えられた。ドパミン、ドパミンの投与を開始し、同日の夜には尿量、血圧は改善傾向となった。入院4日目以降も経過良好であったため、強心薬を漸減し、入院8日目に投与終了した。【考察】急性心不全はAMIに比較的多い合併症である。原因は機械的合併症から貧血まで多岐にわたる。低血圧、低心拍出が原因の場合、輸液負荷や強心薬による治療が必要である。本症例では弁逆流や心嚢液貯留はなく、比較的広範囲の心筋梗塞であったことなどから低心拍出が原因と考えられ強心薬の使用に至った。左冠動脈や左冠動脈主幹部病変のAMIでは入院加療中に心不全を合併することが多いとされており、術後の心不全合併に注意すべきである。今回、急性心不全を合併したが、適切な強心薬により治療できたAMIの一例を経験したため、これらの頻度やリスク因子について若干の考察を加え報告する。

O-6-3

当院で経験した冠動脈解離による急性心筋梗塞の3例

秋田赤十字病院 臨床研修センター¹⁾、秋田赤十字病院 循環器内科²⁾

○かとう りょうすけ 加藤 僚祐¹⁾、阿部 起実²⁾、青木 勇²⁾、岩谷 真人²⁾、照井 元²⁾

【症例1】45歳女性、16:00発症で救急部を受診した。心電図でII、III、aVFにST上昇を認め、冠動脈造影検査でSeg.4PD diffuse 90%狭窄があった。IVUSで冠動脈解離と診断しステント留置術を行った。【症例2】59歳女性、16:00発症で前医から搬送された。心電図でV1-4にST上昇を認め、冠動脈造影検査でSeg.7 segmental 99%狭窄があった。IVUSで冠動脈解離と診断しステント留置した。【症例3】48歳女性、前日16時から4時間継続した胸痛で循環器外来を受診した。受診時は症状なく、心電図でII、III、aVFに陰性T波を認めた。冠動脈造影検査ではSeg.4PD 75%狭窄を認め、IVUSで冠動脈解離と診断した。責任病変以降の血流は保たれており血管径が小さく屈曲も強いためステント留置はしなかった。上記3症例はいずれも冠動脈所見は一枝病変で、focal asynergyを有しており、max CKは321-717U/Lと低値で済んだ。肥満度、冠動脈血管因子には、ばらつきがあった。血管閉塞と異なる冠動脈造影所見を有した急性心筋梗塞の成因にIVUSが有効であった。文献的考察を加え報告する。

O-5-12

政策医療の精神科救急身体合併症転院事業における整形外科手術症例の臨床像

横浜市立みなと赤十字病院 整形外科

○あしやま じゅん 菱山 隼、若林 良明、浅野 浩司、沼野 藤希、能瀬 宏行、谷山 崇、田野 敦寛、吉田 龍、竹内 彩子、白畑 航、小森 博達

【はじめに】当院では、精神科専門病院入院中に受傷・発症した身体合併症の転院治療を政策医療として受け入れている。骨折などの整形外科身体合併症にて入院・手術を要した患者の臨床像を報告する。【対象と方法】2016年4月-18年3月に本事業にて当科で入院・手術を行った26例33件、男/女 13/13例、手術時年齢60.8(31-82)歳を対象とし慢性疾患や抜釘例は除外した。精神科・整形外科診断名、受傷機転、入院日数、退院後のフォロー状況を調査し、大腿骨近位部(頸部・転子部)骨折例の手術時年齢を、同期間の同骨折手術例(n=434)とM-W U検定を用いて比較した。【結果】精神疾患は統合失調症が21例(81%)と最多で、アルコール性精神障害2例、その他3例であった。整形外科傷病名は大腿骨近位部骨折が17件(52%)と最多で、上腕骨頸部骨折4件、人工骨頭置換術後顔回脱臼3件、その他9件であった。受傷機転は新鮮外傷26件中転倒が19件(73%)と最多で、飛び降り2件、殴打2件、不明3件で、大腿骨近位部骨折に限ると17件中不明1件を除き16件(94%)が転倒であった。入院日数は18.8(8-44)日、退院後の当科外来でのfollow up率は36%(12/33件)と低かった。大腿骨近位部骨折の平均年齢は63.7(47-77)歳で、同期全手術例の80.6(21-107)歳と比較して有意に若年で受傷していた(p<0.001)。【考察】本事業による整形外科手術例は、転倒による大腿骨近位部骨折が過半数を占め、有意に若年で受傷していた。精神科入院中の患者は疾患や投薬の影響による歩行不安定性や、長期入院生活による骨脆弱性などが潜在している可能性が考えられる。元の病院へ戻るため入院日数は短いフォローアップ率は低く、骨粗鬆症治療や再転倒予防のための対策が必要であると考えられた。

O-6-2

Brugada症候群と診断されたベトナム人技能実習生の一例

伊勢赤十字病院 循環器内科

○やまごき たかひろ 山崎 貴史、坂部 茂俊、森 達哉、海野 航平、堀口 昌秀、高村 武志、刀根 克之、前野 健一、泉 大介、世古 哲哉、笠井 篤信

症例:26歳、ベトナム出身男性、突然死の家族歴なし、失神既往あり。現病歴:某年某日、朝からふらつき症状が強く、失神し、顔面裂傷を負ったため最寄りの病院を救急受診した。前院で創傷処置に引き続き失神原因の検索として12誘導心電図を記録したところBrugada症候群Type1波形が確認されたため当科に紹介された。当院にて追加した非侵襲的検査で、心エコーでは明らかな器質的心疾患なく、体表面加算平均心電図は陽性だった。合法的な滞在で健康保険への加入もあったが、帰国日が迫っていたため、侵襲的検査や治療はビザの延長や帰国後のフォローが可能であることを確認してから進める方針とした。入国管理局との交渉では滞在を年単位で延長することは不可能であるとの返答だった。またICD植込みを行った場合、本国でフォローを受けるのは経済的に困難であるとの結論に至った。患者自身は当初治療を希望していたが、突然予定を早め帰国したため、宛名のない紹介状を書くにとどまった。独立した組織に通訳を依頼しなかった事が悔まれた。2018年末にベトナム技能実習生の突然死が多いとの報告があった。技能実習生の数が年々増加しているため、対策を検討する必要がある。

O-6-4

近年の感染性心内膜炎患者の傾向

諏訪赤十字病院 循環器内科¹⁾、上越総合病院 循環器内科²⁾、

諏訪赤十字病院 心臓血管外科³⁾

○にしやま みずき 西脇 漢¹⁾、筒井 洋¹⁾、籠島 充²⁾、小山 由志¹⁾、榎本 香織¹⁾、小松 美穂¹⁾、川口 政徳¹⁾、相澤 万象¹⁾、河野 哲也³⁾

当院では近年、感染性心内膜炎の入院患者が増加傾向であったが、予後や患者背景、特徴については検討されていなかった。そのため当院を含む多施設における過去15年間の感染性心内膜炎入院患者の平均年齢、基礎疾患、起因菌の傾向、合併症、予後規定因子などを明らかにし、今後の展望や傾向について考察した。現在、感染性心内膜炎患者の3人に1人が70歳以上といわれており、高齢化社会の到来による平均年齢の上昇が予想され、感染性心内膜炎がcommon diseaseなる可能性もありえる。しかし、依然として臨床的特徴については不明な点が多く、今後さらなる追求を要すると考えた。

10月17日(木)
一般演題(口演)抄録